

序

実験室で明らかにされた最先端の研究結果は、学会発表や学術論文（オリジナル論文）として報告される。次に、最新の成果をまとめた総説（実験医学誌など）として発表され、その後教科書に記載されていく。毎年、たくさんの研究成果が報告されるが、時間の経過に伴って淘汰されていく。後になって間違いであることが判明したり、再現性がなかったりするものなどは消えていく。評価の定まった「学問」としての教科書が完成するためには、一定の検証期間（場合によっては数十年といった時間のファクター）が必要であろう。

私は10年ほど前から大学で「分子栄養学」と「食品機能学」の講義を担当することになった。「分子栄養学」は18世紀にはじまった栄養学の成果を1950年代から発展した分子生物学の言葉で語るというように理解した。一方「食品機能学」で扱う、機能性食品の概念は1980年代にはじまったものであり（「概論」参照）、まだ評価の定まりきっていない、若い学問ではないかという印象を受けた。

この10年の間に大学教員・研究者としての観点から、最新の研究成果を眺める機会を得た。その間、分子栄養学と食品機能学とを結ぶ顕著な成果が次々と報告された。またそれ以前の独創的な研究の再現性が確認され検証されていった。

このような時期に羊土社より「栄養・代謝物シグナルと食品機能」に関して増刊号をまとめる依頼をいただいた。最新の成果を整理するのにいい機会であると考え、お引き受けした。本書の執筆をご快諾いただいた研究の最前線の先生方に心より感謝したい。本書の内容は、数年後の新しい教科書の章となっていることであろう。本書の読者が栄養・代謝物シグナルと食品機能の分野に興味をもち、新しく教科書の1ページになるような/あるいは教科書を書き換えるような研究が発展するきっかけになることを願いたい。

2022年3月

亀井康富